

会話における発話の重なりについて

—協力的側面を中心に—

藤井桂子 大塚純子

要 旨

日常の会話の中で発話の重なりは、しばしば生じている現象であるにもかかわらず詳しく分析がなされていない。小論では、重なりについて、妨害、中断、話者交替のタイミングの失敗といった否定的な面だけでなく、協力的な側面を明らかにしたいと考え、複数の友人同士の実際の会話6組から、重なりの頻度、種類、機能について、調査・分析を試みた。その結果、友人同士の会話では、①平均3.7 発話に1回の頻度で重なりが生じていること②要因から「自己選択」「割り込み」「見なし」「継続」の4つに分類し調べたところ、重なりの半数は先行発話の途中で重なる「割り込み」であること③重なり全体の少なくとも40% 以上は、先行発話への同意、共感、関心などを積極的に示し会話を促進させ、話者同士の連帯感を強める協力的な性格を持つこと、が明らかになった。

[キーワード] 重なり、先取り、協力、会話の促進、連帯感

1. はじめに

私達は普通「会話」というと、一人ずつが交替で話す、つまり、一人の人の発話が終わったところでそれに反応して次の話し手の発話が始まり、それが終わるとまた次の発話が始まるという形を、まず考えるのではないだろうか。小説や戯曲、脚本などの会話でも、重なりが書き表されていることはほとんどない。しかし、実際に話されている会話を書き起こしてみると、話し手の発話の終了を待たずに次の話し手が発話を始めたり、同時に話し始めたり、途中で割り込んだりという発話の重なりが頻繁に見られることに気づく。特に会話の参加者が複数の場合には重なりが目立つようであるが、そこには参加者の相互作用に関わる何らかの意義があると考えられるのではないだろうか。小論では、複数の話者による自然な会話の分析を通して、日本語においては実際、どのくらいの頻度で重なりが生じているか、どのような場合に重なりが生じているか

を明らかにし、その意義を見出していくことを目的としている。特に、会話形成における話し手と聞き手の協力という側面から、協力的な重なりが見られるかどうかに関心をあてて見ていくことにする。

2. 先行研究について

Sacks, Schegloff, and Jefferson(1974) では、なぜ発話の重なりが起こるかということを中心に話し手交替のシステムから説明している。

- (1) 自己選択 (self-select)競争による場合： 現在の話し手が次の話し手を指名しない時は、早く話し始めた者が話す権利を得る。そのために次の話し手になろうとする複数の者が同時に話を始め、重なりが起こる。
- (2) 次に話そうとする者が先行話者の発話の終わる場所 (話し手交替適格箇所 transition-relevance place:TRP) を見誤って話し始めた場合、先行話者の発話の末尾と次の話者の発話の重なりが起こる。

Levinson(1983:299), ザトラウスキー (1993:13)は、この(1)(2)の場合を「意図せずに起こる重複 (inadvertent overlap)」とし「妨害的中断 (violative interruption) と区別されるとしている。一方、Tannen(1984)はTannen自身が属するユダヤ系のニューヨーク出身者に共通に見られる会話のスタイル (high involvement style - 熱中スタイル- と名付けられている) においては、重なりは会話参加者の興味や関心の深さなど協力的な態度を示すものであり、会話の促進にとって、むしろ必要とされていると指摘している。発話の重なりそのものを対象とした研究では、男女間における割り込みの現象の社会的意味を考察した山崎・好井 (1984) と、5件の電話の会話での重なりを分析した吉田 (1989) がある。吉田の報告では、会話参加者の親疎関係、心理状態、会話の運び方の癖、話題に対する関心度、談話展開の難易度、などが重なりが起こる要素となるとしている。

3. 調査方法

1) データ

親しい友人同士の会話6組を収録し、トピックのまとまりによって区切り、文字化を行った。データについての詳細は表1の通りである。

[表1] 会話データ

データ名	人数	国籍	性別	職業	年齢	時間
会話1 (観察)	3人	日本	女性	大学院生	20代-40代	7分0秒
会話2 (縮)	4人	日本	女性	大学院生	20代-30代	5分45秒
会話3 (どハ)	4人	日本	女性	大学院生	20代-40代	2分17秒
会話4 (休み)	4人	日本	女性	大学院生	30代-40代	4分35秒
会話5 (ナデコ)	4人	日本	女性	主婦他	30代-40代	10分40秒
会話6 (ヤマ)	4人	日本	女性	主婦	30代-40代	25分00秒

2) 分析方法

分析の対象とした重なりは、実際に生じた発話の重なりのうち、実質的内容を伴わないいわゆる「あいづち詞」を除外したものである。但し、発話末尾に重なるあいづちは文中の聞き取り表示とは機能が異なる(森山1989)と考え分析の対象としている。発話についての定義は杉戸(1987)を参照にした(5. 動詞の頻度の参照)。合計 313の重なりを6組の会話から収集した。まず、頻度を調べ、重なりの起きた要因に注目し大きく4つに分類した。次ぎに、構成比を調べた。さらに、重なりの生じた環境を、要因、発話意図、発話内容、先行話者の反応などから分析し、先行発話に対して協力的な重なりが生じているかを検討した。

4. 重なりの分類

重なりを分析する上で、まず、重なりが生ずる要因から、次頁の図1のような分類を試みた。

A. 自己選択競争によるもの「自己選択」

Sacks 他(1974)が話者交替のシステムから説明しているように、一人の発話が終了したときに、次の発話順番を取るために、他の会話参加者の二人以上が同時に発話を始めた場合に生ずる重なりである。

<例1> 手土産について、タコのサラダが候補

a : なんかも大人向きだね。

→ b : だから タコのサラダとー

→ c : [お赤飯でもいいんじゃない? あなたの得意な。

b cの発話が同時に始まり、重なりが生じている。

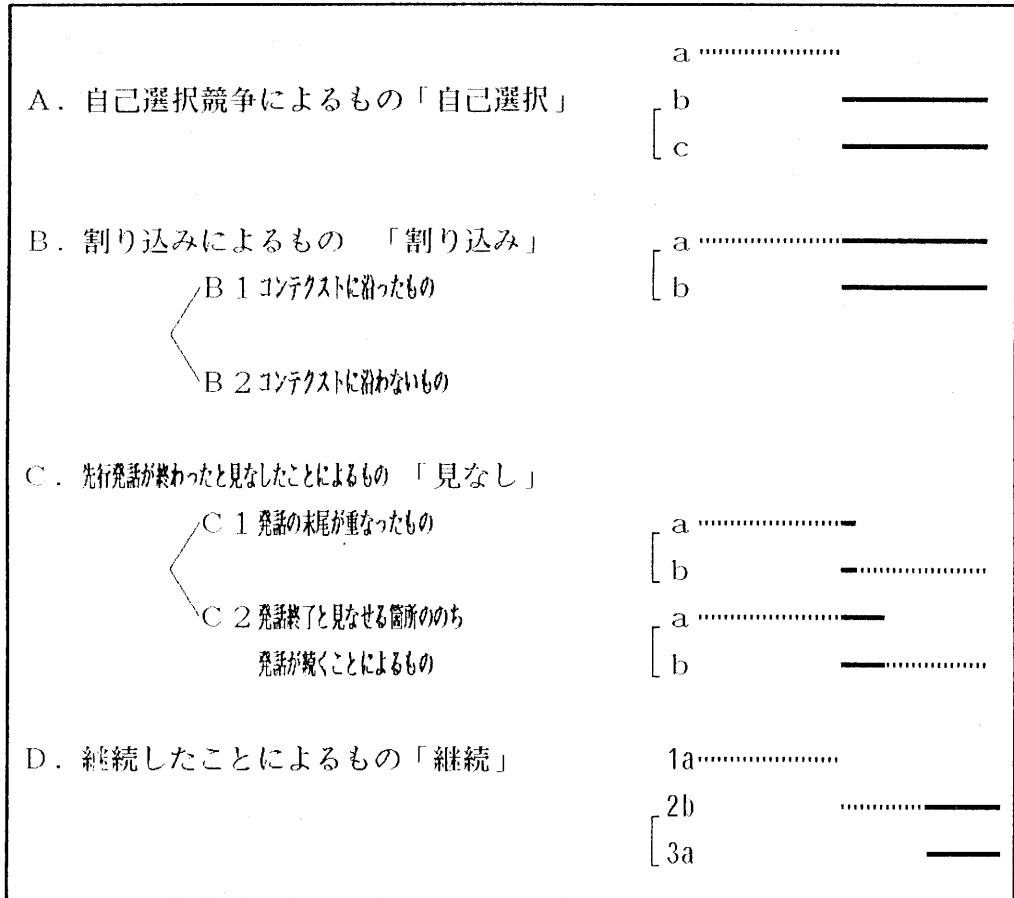
*abcは話者、

[は同時発話部分の開始箇所

→ は注目すべき発話を示す

[図1] 重なり分類

* abcは話者、 線は発話部分 ——— は重なり部分を示す



B. 割り込みによるもの「割り込み」

A「自己選択」が偶発的に生じたのに対し、Bは先行する発話の途中（TRPでない所）で、発話が重なることを承知で、他の話者の発話がなされたものである。<例2><例3>はコンテキストに沿った重なりB1の例である

<例2>

a : もう1種類はね、何か ね、オレンジゼリーみたいなかんじ。
 → b : [アイスクリーム？]

<例3> 食事の場所選びの場面

a : あっ 駅前に焼き鳥屋さんがあったよ。
 b : だから、それぐらいで 軽く 食べられるほうが
 → a : [でもやっぱりいろいろある方がいいから]

B2は、会話の最中に会話の進行とは関係なく、その場の突発的なできごとについて発言したり、急に何か思い出して発言し、進行中の発話と重なるような場合である。例えば、急にコップの水がこぼれて、「あ、いけない」と口にしたり、「あっ、もうこんな時間」と言ったりするような偶発的な場合である。

C. 先行発話が終わったと見なしたことによるもの「見なし」

C1は先行発話の末尾との重なりで、発話の末尾の最後の要素まで待たなくとも、発話の終了箇所を予測することができるために引き起こされたものである。末尾の要素とは、最後の数個の音や、引き伸ばされた音などをさす(Sacks他1974)。「ます」「です」や終助詞や接続助詞などが重なるものがこれに当たる。

<例4>

a: ほーんとにおいしかった から。
→ b: [それと何 2種類って。

C2の重なりは、先行発話が終了となりうる箇所(TRP)で他の話者の発話が開始されたが、さらに先行発話が続いたために起こった重なりである。呼び掛けや、英語の付加疑問文の類(Sacks他1974)、日本語の重なりでは倒置文の頭や、発話の繰り返し部分などで見られ、重なりが長いものも生じている。<例5>は倒置文の重なりである。

<例5>木曜日に子供を預かってもらうことになった経緯についての話。

a: 向こうから言ってくれたんだよ 木曜日はどうするのよ、aさんって。
→ b: [あらっ、いい友達ができたねー

D. 継続によるもの「継続」

発話1aが一旦とぎれた箇所で、他の発話2bが始まるが、これが終了しないうちに話者aが自分の発話権が続いている考え、発話3aを行うことにより生ずる重なりである。2bが無視される場合と3aが2bに反応する場合がある。

<例6>

1a: 12時40分に待ち合わせしたのね。
2b: 住友ビルはどこ？
→ 3a [でーもしかしたらだから西口かどっかであたしたち会っていい？
話者aは1aのポーズのあとに2bの発話が生じていることに気付かず(3a冒頭で反応が見られない)発話を続け3aで重なりが生じている。

5. 重なるの頻度

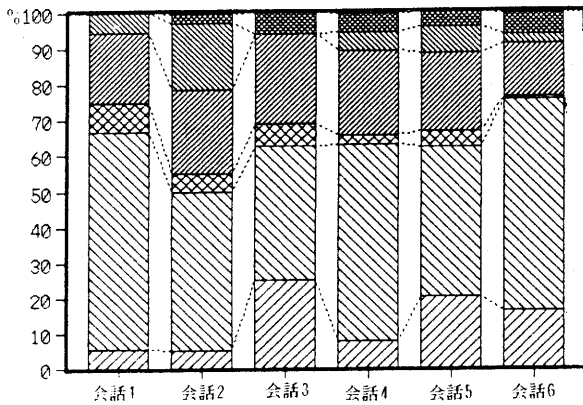
つぎに、[表2] から、重なるの出現を数量的に見てみよう。

[表2] 重なるの頻度

データ名	人数	時間	重なり数	重なり数/分	発話数/重なり	発話数/分
会話1(研究室)	3人	7分0秒	36回	5.1/分	4.2/重なり	20.5/分
会話2(新館)	4人	5分45秒	38回	6.6/分	3.8/重なり	25.5/分
会話3(どこ)	4人	2分17秒	16回	7.0/分	4.0/重なり	28.0/分
会話4(休み)	4人	4分35秒	38回	8.2/分	2.6/重なり	21.0/分
会話5(ナガテコ)	4人	10分40秒	69回	6.5/分	3.6/重なり	23.1/分
会話6(ヤマ)	4人	25分00秒	116回	4.6/分	3.8/重なり	17.5/分

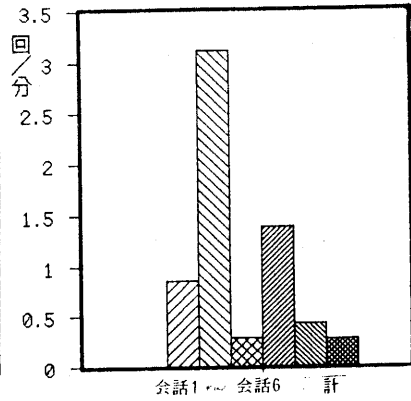
重なるの起こる頻度を見ると、1分あたり4.6回から8.2回、平均して6.3回の重なりが生じている。これを発話数との関係からみると2.6発話から4.2発話に1回の割合で重なりが生じており、平均すると3.7発話に1回の重なりが起こっている。発話の単位は、杉戸(1987:83)の定義「ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続(但し、笑い声やあいづちも含む)で、他の参加者の音声言語連続(同上)とかポーズ(空白時間)によって区切られるごとに1単位と数えようとする単位である。」に従った。但し、笑い声やあいづちは発話数に入れていない。どの会話においても、ある一定以上の重なりが生じており、友人同士の会話では重なりが一般的に見られることがわかる。次頁[グラフ1]は会話ごとに重なるの要因別の構成を示しているが、共通して現れているのは何らかの意図を持つと考えられる「割り込み」の割合が最も高い点である。全体では重なるの約半数を占める([グラフ2]参照)。「割り込み」は、否定的、ルール違反的に解釈される場合が少なくない。しかし、友人同士の友好的な会話において、妨害的な重なりだけが頻出しているとするには疑問が生ずる。また、偶発的な重なりについても、詳細な検討が必要であろう。Tannenが high involvement style の話者においての特徴の一つとして明らかにした協力的な重なりが、日本語の会話の場合にも多いのではないかということに次に検討する。

[グラフ1] 発話の重なる要因



[グラフ2] 発話の重なり

要因別絶対出現率



自己選択 割込み1 割込み2 みなし1 みなし2 発話継続

6. 協力的な発話の重なり

収集した重なりについて先行の発話（重ねられた発話）に対して、重ねた発話が協力的といえるかという観点で分析を行った。協力的か妨害的かという判断は最終的には会話の参加者本人がどう認識するかに関わっており、判断できない部分もあるが、協力的な重なりについて次の3つの基準を設けた。(1) トピックを変更しないこと。(2) 発話権の移動がないこと（ここで発話権は、発話を続ける権利として考える）。(3) 先行発話の展開を助けること。また、協力的な重なりの結果、先行話者に対する援助、同意、共感、関心、理解などが積極的に表現され、会話の進行を促進したり、お互いの連帯感を確かめあったり、強めたりする効果が生ずると考えられる。4で示した重なりの分類に従って、具体的に検討する。

A. 「自己選択」の場合

「自己選択」によって重なったお互いの発話bcは<例1>のように、普通、競争的、妨害的な関係になり、どちらかに、場合によっては両者に中断が生じる。しかし、両者の発話が先行発話aに対して、同じように反応し、コーラスのようになる場合は、お互いの同意を確かめ合い、連帯感を高める効果を生むことができるであろう。

<例7>

a : でも、もうそろそろ終わっちゃうんじゃない、ブームが。

→b : ああ そう そう そう そう。

→c : [ああ もう終わっちゃうんじゃない。

ここでは、トピックの変更もなく、b, cが、互いの発話によって発話を中断してはいない。bは「そう」を4回連続して言っているが、最後の方の「そう」は、cへの同意も合わせて表現しているともいえる。

B. 「割り込み」の場合

B1では、妨害的か協力的かの判断がより複雑になってくる。協力的な重なりと比較するために、まず、典型的な妨害的な発話の重なりを見てみよう。

<例8> レストランについて

a : だからちょっとわさわさしてるからって ワインのサービスが

→b : [だってね、わたしね、でも、

b あそこのあの、あそこ、いつも通る時にさ、…… (略)

この例では、aの発話の途中でbが「割り込み」、その結果、発話権がaからbに移り、それに伴いトピックが変更している。

この例に対し、協力的な重なりでは、先行発話のトピックや、発話権が維持されるほか、発話の展開を助ける方策として、発話を重ねたタイミングや重ねられた話者の反応からお互いの協力的な姿勢を示すパターンが見られる。

始めに、相手の言おうとすることを予測して相手の発話を先取りする「先取り」に関わるものを見ていきたい。まず、相手の「発話を引き出す」例である。

<例9>

a : 彼女達はふたりとも あ の 来てないって言った。

→b : [来ないの？

ここでは、aが言い淀んだ箇所で、bはaが言おうとしたことを「先取り」し、bの発話に重ねて、発話している。「先取り」はそれ自体、聞き手に対して、聞いていること、そして内容を理解していることを示すコミュニケーション上の一つの方策であるといえるが、この例ではさらに、予測した言葉の提供が、相手の言葉を引き出し、発話の進行を助けていると見ることができる。次は、参加者が共同して「文の形成」を行う例である。

<例10>塾の生徒獲得に関して

a : だから××塾も それに
→ b : [あわせたのよね。
a : とられないように。

ここではbの発話がaの発話を引き取り、完結させる形で割り込んでいるが、aの発話とは少しずれ、aの発話を一端休止させている。しかし、aはbが発話を終わるとすぐに、bに反応し、さらに補足の発話を追加しており、全体として見ると、二人が共同して一つの文を作り上げたことになる。第三番目の発話はこの他、先取り発話の内容の「パラフレーズ」の場合もある。このような共同作業は、お互いに協力していく姿勢が無ければスムーズに行くことは難しく、もし、不快な気持ちがあるような場合は、重なりのもとにポーズが生じるなどの滞りがあらわれると考えられる。次は発話の「コーラス」の例である。

<例11>

a : 西口は一つしかないけれど 紛らわしい 中央西口っていうのがあるのね
→ b : [中央西口があるのよね。

この例でも bがaの発話の途中から割り込んで、aの発話を完結させているが、それがちょうどaの発話と一致してコーラスを奏でている。ここでの重なりはaの発話を妨げることなく、むしろ補強しながら、見解の一致や共感を示す協力的なものとすることができよう。次の例は相手の発話が予測できた結果、発話に割り込んで「先に応答」してしまう場合である。

<例12>

a : 私たち、今度それじゃ
→ b : [ええ、行きましょうよ

この場合、aは発話を中断させられたことになるが、bを誘うという発話の目的は達しており、bはaへの賛同をタイミングを早めて積極的に示すことで、その気持ちを強く表し、相手との連帯感を強化していると考えられる。また、「あしたはちょっと、あの、…」というような発話に対して、相手ははっきり言いたくない部分は言わせないうちに、「ああ、じゃ、また今度。」と先取り応答する場合にも協力的姿勢が見られよう。

以上のように先取りの発話が先行発話に割り込んで重なりを生じさせている例は少なくない。分析の対象とした6組の会話において、「割り込み」の約2割が先取り発話による重なりである。これらは、例で見てきたようなパターン

の使用から相手に対する協力的姿勢を示していると判断できる場合が多い。

次は発話の「繰り返し」が使われる例である。

<例13>

a : 入りにくくなっちゃうからはやめ はやめに
→ b : [はやめはやめに
a : はやめはやめに入れちゃうのよ

この場合の重なりも、なにか新しいことをいうのではなく、相手の発話したことばを自分の発話に引き入れて、関心や共感を示し、会話を盛り上げていると考えられる。さらに重ねられたaがまたそのことばを発話に取り入れて、いっそう会話が盛り上がっている。Tannen (1984) はhigh involvement styleの中では会話への意欲や関心、共感を示すものの一つとして、繰り返しが見られることを述べている。

「驚きや感心などを表す表現」も「割り込み」に見られる。

<例14>受験について

a : 塾推薦があるとか聞いて、 えーとか思って。
→ b : [えーそんなのあるの？

先行発話への共感や、相手が期待した反応の場合は、会話を盛り上げ、促進させることができるであろう。

以上 B1について協力的重なりのパターンを見てきた。これらからわかるのは、重なりが協力的なものとして成り立つには、関心や共感を意味するために現われた重なりを、相手が受け入れ、さらに、共感を示すというような、参加者間の一致した理解に基づく相互作用が必要であるという点である。B2については、進行中の発話を中断させるか、あるいは、進行中の発話の中に埋もれてしまい、いずれにしても、協力的な重なりのケースを見付けることは難しい。

C. 「見なし」の場合

C1, C2は、TPR が予測可能であることに基づくもので、偶発性が強いが、会話参加者の積極的な姿勢の表れとして重なっている場合も無視できない。Tannenはhigh involvement styleの話者にとって堪え難いのは沈黙であり、先行発話への重なりや間のない発話は相手の発話への一体感、熱意、関心を示すと述べている。「見なし」の協力的重なりは、会話分析における「優先的応答体系 (preference organization)」の概念を用いて説明できるものがある。

「優先的応答体系」とはある一つの発話に対する応答に好ましいもの（無標）と好ましくないもの（有標）の順位づけがあり、好ましい応答は短い表現で素早く現れるが、好ましくない応答は、遅れ、前置き、遠回し、長い表現などの傾向を持つというものである。Levinson(1983:336)は、好ましい応答としては、依頼や申し出、誘いに対しては承諾、評価に対しては一致、好ましくない応答はその反対の例を示している。次の例はその発話が好ましい応答であるため、素早い反応となり、相手の発話の末尾に重なっているものとして説明できよう。

<例15>

a : ××塾は強い。
→b : [強いんですってね。

bの発話は重なったことで、相手の発話への共感を強調し、相手との連帯感の構築に貢献することになると考えられる。感謝や謝罪に対する否定の応答がしばしば重なるのもそれが好ましい応答であるためと説明することもできよう。

<例16>

a : ありが とうございました。
→b : [いいえ、いえいえいえ。

優先的応答体系の概念は「割り込み」の先取り応答にもあてはまるであろう。

D. 「継続」の場合

2bが先取りの発話の場合、3aは、2bにいち早く反応し、2bの予測が正しいことを伝え連帯感を確認するという意味で協力的であると考えられる。但し、発話権についてはずっと話者aが維持していることになる。

<例17>

1a : 食堂のあれにー
2b : ベビーシッターー求む？
→3a : [ベビーシッター求むってなん火曜だけとか… (略)

さて、以上のような観点から「協力的」と判断できる重なりを6組の会話から数え、総重なり数に占める割合をみると、会話1は38.9%、会話2が55.1%、会話3が12.5%、会話4が47.4%、会話5が39.1%、会話6が41.4%であった。全体では、重なりの約42.0%を協力的な重なりが占めることになる。この数値は、他の約60%の重なりが妨害的であることを意味しているのではない。偶発的で先行発話にほとんど影響ないもののほか、協力的か妨害的かはっきり判断

できない重なるの数も多く含まれている。たとえば、言葉や内容の確認などの重なりはその時点では先行発話に妨害的であっても、発話を相手に理解してもらおうという目的から見れば、発話をさらに進める上での必要な手続きとして、協力的なものとも見ることもできる。しかし、重ねた発話の長さやその後の展開によってその意義も異なり、単純に判断することは難しい。紙面の都合上、判断が難しい事例を一つ一つあげることができないが、これらの重なりの中にも協力的な重なりがありうることを考えると、協力的な重なるの割合は実際はこの調査での平均値である42.0% よりもかなり高くなると考えられる。このことを踏まえると、日本語における友人同士の会話に見られる発話の重なりは、妨害というよりも、むしろ会話参加者の同意、共感、関心、理解などを積極的に表現し、会話参加者同士の連帯感を強め、会話を盛り上げ促進させる協力的な側面を多く持っているということができよう。

7. 終りに

発話の重なりについて、その種類と構成比、頻度、協力的側面を見てきた。協力的側面については、先行発話との関係にしばって分析したが、会話進行全体との関係でも見ていくこと、また、妨害的重なりについて分析を進め、さらに重なるの働き全体を分析していく必要がある。今回明らかにしたものは、友人同士（女性）の会話をデータとしており、男性が加わった場合、男性同士の場合、目上の人との会話の場合など別の条件の時に、重なるの現象がどう変化するか興味深い点である。これらについては今後の課題としていきたい。

主な参考文献

- 堀口純子 1988 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』61号(13-26)
- メイナード・K・泉子 1993 『会話分析』くろしお出版
- Levinson, Stephen C. 1983 *Pragmatics* Cambridge: Cambridge University Press(レヴィンソン 1990 『英語語用論』安井稔・奥田夏子訳 研究社)
- 水谷信子 1984 「日本語教育と話ことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集・2・言語学編』三省堂

- 森山卓郎 1989 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究Ⅰ』(62-88)
大阪大学 文学部日本語学科(言語学系)
- Sacks, H., Schegolff, E. A. and Jefferson, G. 1974. 'A Symplest systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation' *Language* 50
- 杉戸清樹 1987 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸層－座談資料の分析』(68-106)国立国語研究所
- Tannen, Deborah 1984 *Conversational style :Analyzing talk among friends* Norwood, N. J. :Ablex.
- 山崎敬一、好井裕明 1984 「会話の順番取りシステム－エスノメソドロジへの招待」『言語』7(86-94) 大修館書店
- 吉田智子 1989 「発話の重なり現象の考察－電話会話の分析－」『日本語教育論集6』(76-93) 国立国語研究所
- ポリー・ザトラウスキー 1993 『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジ－の考察－』くろしお出版

[お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士2年]